

カナダ産キャノーラの需給と品質の状況について —日加菜種協議を踏まえて—

日本植物油協会

今年 11 月、協議開始以来 40 周年目を迎えた日加菜種本協議が東京で開催されました。以下、今年のカナダ・キャノーラの需給と品質につき、日加菜種協議の報告書を中心に、その概要をご紹介します。

まず、需給状況ですが、今年のカナダの春の気候は良好で、夏に必要な降雨があり、熱波もなく、気候がよく、十分な生育期間をとることができました。その結果、キャノーラの生産高予想も高いものとなり、収穫の半分を過ぎた段階で、44.3Bu/エーカーと記録的な単収を予測、この結果、今年の実産予測については 2,012 万t程度との見通しが示されたところです。これは、カナダのキャノーラ作柄としては過去最大で、2013 年の 1,880 万tを上回る記録的なものです。しかし、降雪等の影響で越年する部分もあり、また、カナダ国内の需要等も旺盛であり、全体として需給にはタイト感があります。以下、日加協議の報告のポイントを紹介します。

カナダ産キャノーラの 2016/2017 年度の見通し

	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17e
Beginning Stocks	1473	1952	2767	2209	720	588	3008	2543	2143
Production	12641	12621	12756	14576	13989	18801	16410	18377	20118
Imports	113	146	201	90	124	89	77	105	91
Total Supply	14227	14719	15724	16875	14833	19478	19495	21025	22383
Seed & Residual	112	378	109	465	271	452	429	398	309
Crush	4280	4788	6310	6999	6717	6979	7360	8315	8789
Domestic Use	4392	6166	6419	7464	6988	7431	7789	8713	9098
Exports	7883	7086	7095	8690	7257	9039	9163	10169	10628
Total Use	12275	12252	13514	16154	14245	16470	16952	18882	19726
Ending Stocks	1952	2467	2210	721	588	3008	2543	2143	2657
Stocks/Use	16%	20%	16%	4%	4%	18%	15%	9%	13%

1、本年度のカナダ産キャノーラの需給について

本年度のカナダ産菜種の需給について、まず、今年のキャノーラの生育状況について生育経過は順調であったとの説明の後、「通常、8月終わり～10月終わりが収穫時期だが、9月の降雨状況は一部を除き、キャノーラベルトは115～150%の降雨があり、収穫に遅れが生じる事態となった。最初に降雪が10月末頃あった。多くの地域では、ドライグレインの状態で収穫できたが、カナダ西部では降雨が続き、水分を含んだ収穫となった。10月初めからは厳しい状況が続き、アルバータ、サスカチュワン全域で降雪があり、一部地域では降雪量2～3インチだったがティースリーパー地域では12インチの降雪となった。その頃、サスカチュワンのキャノーラの23%、アルバータでは38.2%が未収穫と予測され、500万tのキャノーラが未収穫と予測された。10月の降雨量は、キャノーラベルトで平年の200%となり、10月3日から10月末までほとんど収穫されない状況となった、10月末段階で未収穫の400万tが畑に残っている状態となった。収穫された菜種の水分量は11～20%、エレベータや生産者のヤードで乾燥機がフル稼働。11月に入り、平年を上回る気温であり、降雪がない。現在、収量を出すのは難しいが全体の予測として、これから300万t、5%は収穫されず、100万tは収穫されず春に持ち越されると見込まれる。春に収穫される分の単収と品質は分からないが、2～3週間降雪がなければもう少し進捗がみられるかもしれない。需要側の状況は、国内搾油量は安定的に伸び続けている。主要な拡張計画は進み、もうすぐ完了する計画もある。これからもプラントの効率性を高めるためボトルネックの解消に努める、国内施設の稼働率はだいたい88%。輸出予測は1060万t程度。」とする説明があった。次に、中国における夾雑物の問題に関連して、「夾雑物関係は解決したが、中国向け輸出は去年を若干下回る390万tとみている。」とした上で、「日本向けは220万t、メキシコ向けは140万t、どちらも重要で安定的な顧客となっている。欧州の作柄が下がり、今年は欧州向け輸出を80万tとみているが、大部分が販売済みとなっている。ドバイは79万t、パキスタンが90万tと、大きなキャノーラの輸出先。全体として期末在庫が260万t、在庫率13%となる。これから先収穫される300万tは、破碎による収量ロスが発生する可能性がある。また、100万tは春まで畑に残され、単収・品質は分からないがこれが失われてしまうと、期末在庫が160万t、在庫率8%となる。春まで収穫されないものが100万t、未収穫のものが400万tあると思われる。カナダ西部の生産者は天候の影響を受ける作物にたくさんの投資をしている。生産者は通常得られる代金を得られずにおり、また、契約どおり作物を届けられない状態にある。」との報告がなされましたが、春まで一定量が収穫されない事態については、「2009年に似た状況があったと思うが、播種と収穫が遅れたが、11月には天候に恵まれ大部分の収穫が済んだ。地方で、わずかに年を越したこともあったと思う。過去32年でここまでの規模は記憶の限りない。」との説明が行われました。

ここでは、最後に、比較のため、カナダキャノーラの需給に関連し、米国農務省が12月に発表した最新の需給予測レポートを参考に供します。

米国農務省によるカナダ菜種の需給予測について

項目	年度	2016/17(見込み)				
		2015/16	(12月予想)	前年度比	前月比	(11月予想)
生産量		18.4	18.5	0.7%	0.0%	18.5
消費量		8.7	8.7	0.1%	-1.1%	8.8
うち搾油用		8.3	8.3	-0.2%	0.0%	8.3
輸出量		10.3	9.7	-5.6%	0.0%	9.7
輸入量		0.1	0.1	0.0%	0.0%	0.1
期末在庫量		2.0	2.2	8.0%	0.0%	2.2
期末在庫率		10.6%	11.8%	1.2pt	-0.1	11.9%
(参考)						
収穫面積(百万ha)		8.32	8.05	-3.3%	0.0%	8.05
単収(t/ha)		2.21	2.30	4.1%	0.0%	2.30

2、本年度のカナダ産菜種の品質について

次に、今年のカナダ産菜種の品質については、日加菜種協議の段階では、未収穫分が多く、基本となるサンプル数に限界があるとした上で、日本サイドでも関心の高い油分やたんぱくの分析に関して、以下の説明が行われました。

「油分に関して(カナダにおいて、これまで分析したもの)については 44.7%で、昨年(2015 年)より 0.5%高い。また、過去 5 年平均や 10 年平均も上回っている。37.1%から 49.9%の範囲である、その理由は昨年に比べて気温が低いためである。

カナダ産キャノーラの 2016 年油分について
Canola No.1 Canada oil content (% , 8.5% moisture)

	2016		2015	
	Mean	Range	Mean	Range
Manitoba	44.0	37.5 – 49.0	43.7	39.1 – 49.0
Saskatchewan	45.2	37.1 – 49.9	44.7	39.2 – 49.7
Alberta	44.1	38.0 – 49.2	43.8	36.1 – 50.5
Western Canada	44.7	37.1 – 49.9	44.2	36.1 – 50.5
	5 year average			44.4
	10 year average			44.3

カナダ産キャノーラのたんぱく含有
Protein content in No. 1 Canada Canola

	Protein content (% , 8.5% m.b.)				
	2016		Average		
	Average	Range	2015	2014	2013
Manitoba	20.9	16.6 – 24.8	21.0	20.8	20.6
Saskatchewan	19.6	15.6 - 26.0	20.5	19.7	19.3
Alberta	20.8	15.1 – 26.0	21.7	21.0	19.9
Western Canada	20.2	15.1 – 26.0	21.0	20.3	19.7

収穫時と輸出時の油分には差があるが、これは夾雑物によるものであり、輸出時には取り除く、因みに2015年の夾雑物は1.74%。2016年10月は対前年に比べて油分が増えているが、収穫時に高いので輸出時も高くなることが想定される。蛋白含有量は20.2%で、昨年(2015年)より0.8%低くなっている。気温が低いと油分が上がり、蛋白含有量が下がる、蛋白含有量は収穫時と輸出時でほとんど差がない、夾雑物が蛋白含有量の希釈要因にならないためである。グルコシルレートはほとんど変動ない。2016年は昨年の平均とほぼ一致するとみている。クロロフィル含有量は年度により大幅なバラツキがあるが、今まで集まったサンプルからすると2016年は少なくとも95%が25mg/kg以下となっている、2015年は94.5%が25mg/kg以下であった。今年が98で、昨年が94であることから今年の方がクロロフィル含有量から見ると品質が高い。3州の間ではほぼ差がない。No.2グレードに関しては24PPMとなっており、良好である。

収穫時のクロロフィル含有量から輸出時のそれを予測することは難しい。夾雑物がクロロフィル含有量を左右するからである、かなりの幅、バラツキがある。輸出時のクロロフィル含有量は昨年を下回るであろう。

オレイン酸含有量は62.2%で昨年より若干下がっている。気象によるが、冷涼になるとオレイン酸含有量は下がる。オレイン酸含有量が下がると α -リノレン酸含有量が上がる、ヨウ素価は α -リノレン酸含有量に連動する、2016年は昨年とそれ程変わらない。全飽和脂肪酸は年度間の変動が少ない。遊離脂肪酸は貯蔵の条件と収穫時の状況による、高水分量を含有している状態でビンに入れると遊離脂肪酸は高くなる傾向にある、貯蔵期間が長期になると遊離脂肪酸は高くなる傾向。収穫時よりステップが間に入るので輸出時点の方が遊離脂肪酸が高くなりがち。

収穫されないまま刈りあげられ、束ねられているキャノーラが農場で寝かされ、水分を吸収する状況に置かれている。予想しがたいのが雪と湿潤な状況が品質にどの程度影響するのかである。どこに注目すべきかと考えるとこのパラメーターこそ注目すべき。もしも収穫が全て終了していたとするなら今期は品質が良好と結論づけられたはず。油分は上がっており、クロロフィル含有量は下がっており、遊離脂肪酸は同じであり、蛋白含有量は下がっている。」

なお、品質の関係では、中国と夾雑物の関係で交渉が継続したことから以下、詳細な説明が行われました。

「夾雑物の経緯を説明すると、1970年代にカナダの方でブラックレグが発生した。カナダは、中国向けに何十年にも渡ってキャノーラの輸出をしていたが、その間この病気が中国まで広まると言う状況はなかった。この6年ほどの間、カナダ菜種産業は何百万ドルも研究プロジェクトなどを投じ、サプライチェーン全体でこの疫病について理解をしたり、あるいはこの疫病が広がるリスクをどのようにすれば削減することが出来るのか、と言ったことも調べて来た。カナダサイドが行った研究プロジェクトについては、2015年・2016年それぞれ実施したが、夾雑物を通してブラックレグと言う疫病が広まるリスクと言うのは極めて低いと言う結果が出ている。現在の貿易の条件などを考え合わせると、極めて低い状態にあり、夾雑物のレベルを1%未満に抑えてみたところでこれ以上上がることは無いと言うところまで低く抑えられていると言う結果である。最終的に9月22日に中国の李克強首相とカナダのトルドー首相の間で覚書を結ぶと言う発表が行われた。その覚書によって今現在の貿易条件の下で貿易は続けられると言う合意がなされた。両国首相がそれぞれ交渉の結果、この貿易の延長する期日を2020年3月31日とする合意をした。両国の首相共にやはりこの目的はキャノーラの貿易を容認する、キャノーラの貿易(輸出・輸入)は継続したいと言う目的があった。今後も中国の規制当局の方が輸入許可書のようなものを出し、カナダのキャノーラをどの港から受け入れるかと言うことは指示してくるであろう。カナダ側は中国の規制当局との共同で研究

を続けて、どうすればブラックレグが広がるリスクを抑えられるかについては研究を続けるということに合意がなされた。カナダ側の観点からはこの病気、疫病そのもののリスクを全体的に下げると言うことを目指す。」との説明がなされました。

3、今後の展開について

今後の展開について、まず、米国の大統領の選挙結果の影響について、カナダサイドは、「現段階で、影響云々を考えるのは時期尚早と考えている。むしろ、カナダ、米国、メキシコにとって NAFTA は重要な協定であることから、その NAFTA に手を入れることになれば悪影響がでることになる。どうなるかは NAFTA 以前の状況を参考に検討する必要がある。当時はオイルもミールもかなり重い関税が課せられていたことからすれば、懸念状況となる。一方でカナダも米国から沢山のものを買っている、そういうことを考えると (NAFTA に手をいれることは) 米国サイドも難しいと考えるかもしれない。いずれにせよ、新大統領には、冷静に考えて政策を判断してほしいと考えている。」としました。

また、中国との関係では「中国の備蓄政策は食料安全保障の一環として定められている。中国政府の懸念は食料の禁輸措置が行われることで、実際にこのような措置がとられたことはここ何年もないが、人口 13 億人の食料が逼迫すると大きな問題になる。備蓄政策の対象は穀物なり油となっているが、それぞれ在庫維持には、タイムリミットがある。その時期を迎えると備蓄された在庫量は何らかの形で解消しなければならない、まさにそのような状況が昨年訪れた。この場合、備蓄時でその支出は 1 万 2000 元程度であるのに対して、放出時には 5,000 元程度であることからすれば、政府の財政から言えば巨額な損失を抱えることとなる。このため、放出する選択肢を中国政府は後送りしてきた。しかし、中国において大きな変化、豊かになり備蓄に関する考え方も変わった。現在、昨年に続き、本年第 2 ラウンドが最近始まったが、そこでの売値が 6200 から 6900 元、現在の相場をはるかに下回っている。これらの製造は 2012 年、2013 年であり、放出されている油の値段と国内市場の値段が近づいている。しかし、ここで売買にかかわっているプレイヤーは従来の搾油事業者等ではない。中国は、今後、備蓄政策の重点をおそらく変えていくであろうと思う。戦争などの可能性が発生すれば逆戻りになるであろうが、知る限りでは、新たな備蓄政策はまとめられていない。もちろん、いつが買いのタイミングかについては誰でも知りたいところだが、格言は、「最安値で買えると思わない方がよい。最高値で買わないのであれば幸運と考えた方がよい」としているところ。なお、今後、中国の備蓄は一定のベースラインまで下げてるだろうし、国内生産も縮小している傾向がある、このためマーケットの状況に対応していくしかない、相手としてはカナダ、量は少ないが豪州ということになる。したがって、今年の中国向け 400 万トンだが、来年は 500 万トンになりそうである。現在の中国の旧穀のマージンは良い状況にあるが、今後、どのような買い付けになるか興味深く見ていきたい。」とする説明がなされました。

以上、カナダキャノーラの今年の需給、品質に関して記念すべき 40 回目となる日加菜種協議の議事録をベースに主要論点についてご紹介しました。ご案内のとおり、我が国においては、カナダキャノーラの消費量が最大となっているところであり、今後とも日加菜種協議を通じてカナダと緊密な連携を取って必要な情報を交換、共有して参る所存です。今後とも全油販連の皆様のご理解とご協力を是非とも賜りたく存じます。